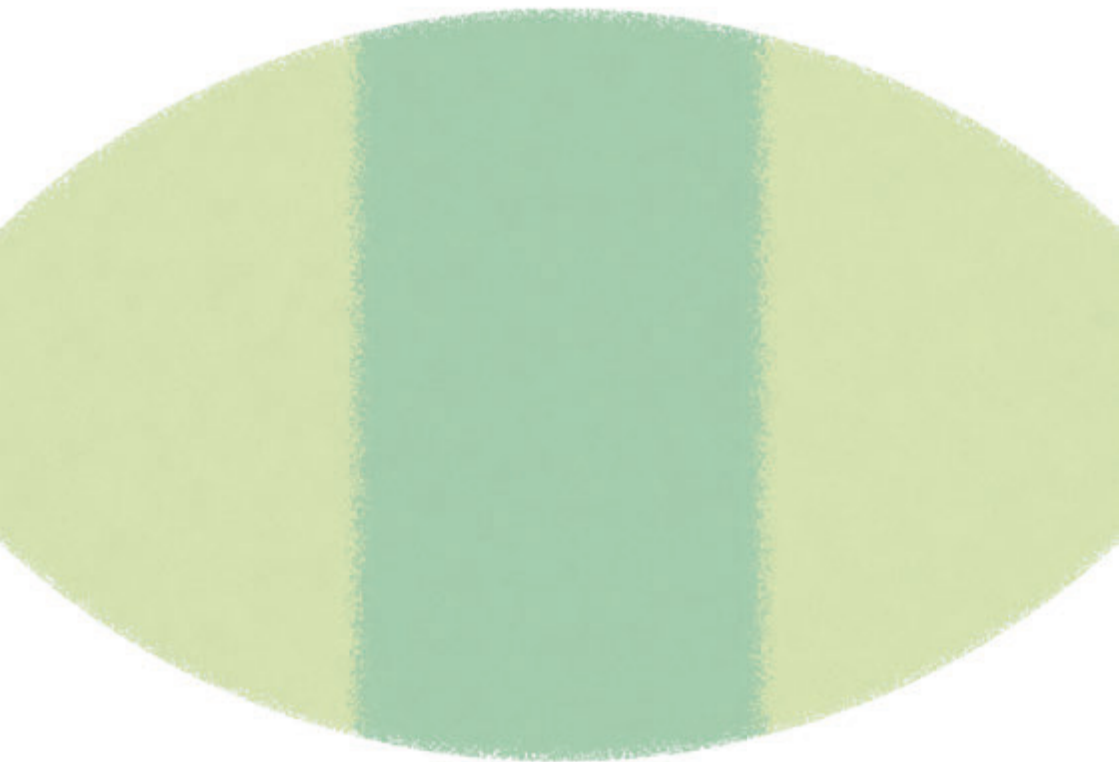


# 同期会運動50年を経て

-現状におけるいくつかの問題点-



藤場 俊基 講述



二〇一三年三月四日 同朋社会をめざす全国集会 講演録

# 同朋会運動五十年を経て

—現状におけるいくつかの問題点—

藤場 俊基 講述

# 目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| はじめに                | 5  |
| (1) 当事者性の欠如         | 8  |
| (2) 危機意識の希薄化        | 13 |
| (3) 歴史的検証の不在        | 14 |
| (4) 批判(精神)の封印・抹殺    | 22 |
| (5) 教学(思想)的確認・検証の欠落 | 23 |
| (6) 信の変質            | 31 |
| (7) 理念の消滅           | 37 |

## はじめに

こんにちは。この会のご依頼を受けまして、他にもっとふさわしい人がいないのかなと思いをめぐらしてみたのですが、なかなか思い当たりませんでした。以前はたくさんいたように思うのですが、同朋会運動の変遷とか意義について考えたり話している人が、いつの間にか見当たらなくなっていました。教団の中では、同朋会運動という言葉がずっと標榜はされ続けてはいますけれども、同朋会運動についてきちんと考えている人というのは気がついたらもうほんのわずかしかないのではないかと、あわせてもう一つ思いますのは教学ということに何らかのこだわりを持ちながら考え続けている人もあまり見当たらなくなりました。この先どうなるのかなという思いを持ちながら、私にご指名いただいたのも何がしかの理由があるのかなと思いつつ参りました。

会場の入り口で「同朋会運動五十年を経て―現状におけるいくつかの問題点―」という資料をお配りしていただいたかと思いますが、今日はこれにもとづいてお話ししていこうと思います。

この数年間、同朋会運動につきましてお話する機会がありましたので、その時にいろいろと問題を整理したり考えをまとめてきました。真宗大谷派教団ということを考えていく上で、今でもやはりこの同朋会運動のことをきちんと整理し考えておくことを抜きにしては教団ということも考えられませんが、私たち真宗門徒あるいは念仏者としての方向性というものもこの運動と無関係には考えていくことができない。少なくとも私にとっては同朋会運動はそういう運動であると思っています。

最初に、私と同朋会運動との関係を簡単にお話しておきたいと思えます。同朋会運動というのは一九六二年に「真宗同朋会条例」というのが成立しまして、そこから教団としての組織的な取り組みとしての同朋会運動が発足しました。それは私が八歳の時のことですが、当時は、そういう言葉を聞いたこともなく、何も知りませんでした。その後私は大谷派というものとほとんど縁がないまま成人しまして、二十七歳になる時に勤めていた会社を辞めて大谷専修学院に入りました。真宗大谷派に自覚的な関わりが始まったのはその時期からですが、それが一九八二年ですから、同朋会運動が始まってからすでに二十年経っていました。それ以降今日まで約三十年、ずっと私の周りには同朋会運動があり、あるいはその影響・薫陶を受けた人々に囲まれながら三十年間過ごしてきたように思えます。

ただ同朋会運動五十年と言いますが、大きな出来事と言いますか事件、同朋会運動を語る上で外しては考えられないような出来事は、私が関わりは始めるより前の二十年間の間にほとんど起こっていません。ですから私は直接的にそういう大きな出来事というのを見聞きしたことはありません。その意味では「遅れてきた青年」という感じがいたしております。

教学的な領域でも曾我先生・安田先生・信國先生・蓬茨先生といった、私が今、本を通して出会っている人達はほとんど亡くなっておられました。私が普通に大谷大学に進学して、教団との関わりが十年くらい早ければ、金子先生・安田先生あるいは信國先生の講義を直接聞くことができたかもしれませんけど、そういう先生には直接お目にかかることができませんでした。その意味でも「遅れてきた青年」という目で自分の立ち位置を見ております。

しかし、そのような先生方の影響を色濃く受けた人たちがたくさんおられました。専修学院や大谷大学、

そして在野にもたくさんの先生がおられましたし、私の周りの先輩たち、十年から二十年ぐらいい上の世代にも個性的で刺激的な先輩がたくさんおられました。同朋会運動を立ち上げて、推進してこられた訓覇信雄さんたちを第一世代とすると、その人たちの影響を受けて第一線に熱い思いで飛び出していった人たちが第二世代。当時三十代から四十代くらいの人たちは、今はもう八十歳以上になっています。発足当初の熱い雰囲気を感じていた人たちは、ほとんどいなくなりました。今でも現役で活躍なさっている方は、どのぐらいいお元気でいらつしやるでしょうか。そして、そのような方々たちから影響を受けた人たちが第三世代。ここにいる人たちの中では玉光さんとか、だいたい私の十年から二十年くらい年上の先輩たちがおられます。私はそういう人たちの後についてまわっていたような気がします。ですから同朋会運動五十年の中の重要な出来事を直接見聞きはしてなかったけれども、その火中にいた人たちからの影響をかなり強く受けた人間であると私自身は思っております。そういう意味で、私は同朋会運動に育てていただいたなという、そういう感じが非常に強くあります。ですから、大事な運動だという気持ちも非常にありまして、このことはずっと頭の中から離れないでおります。

この運動が五十一年目を向かえているわけですが、今日、果たして私が見聞きしてきたような同朋会運動、こういうことが同朋会運動だなど思っているようなことと、今やられようとしていることあるいは推進されようとしていることとは本当に同じことなのだろうかという疑問が非常に強くあります。その中で今日の状況を考えていくときにいくつかの問題点ということで、ここに箇条書きのような形で七点挙げて資料を用意しました。あまり時間がありませんので簡単に、ポイントだけ見ていききたいと思います。

## (1) 当事者性の欠如

一番目は当事者意識あるいは当事者性が欠如しているのではないかとことです。此の運動の担い手はどこに在るのだろうか。担当者はいます。どこの教区に行っても、宗務所にも。でも当事者あるいは担い手と言えるかどうか。担当者と当事者の違いですね。宗務役員あるいは各教区の教化委員会の委員やスタッフは、担当を外れたら、多くの人がもう関係ないという感じになっていくのではないかと。私はかなりの教区の教化事業にお招きをうけたことがあります。だいたい三年が一区切りです。委員さんが変わったら企画も講師も変わります。長期計画で五年十年という形で一つの聖教をじっくり読んでいこうというような、そういう取り組みは教区や組単位の枠組みでは難しいですね。その時の担当者の方は「私が委員をやっている間はお願います」と、最初からこういう依頼の仕方をなさいます。ですから、私が関わっている範囲だけのことしかわかりませんが、十年二十年というような長い間続いているのはいずれも自主的な会ばかりです。そういう会のあり方を見えてきましたね、同朋会運動の当事者あるいは担い手はいったどこに在るのかと思わざるをえないわけです。

そしてその当事者と担当者と似たようなことになりませんが、教区の教化委員会がやっている事業とか企画、行事はたくさんありますけれども、それがたして運動といえるのでしょうか。行事とかそういうことは全く意味がないと言うつもりはありませんけれど、それはやっぱり行事なので、止まっているんですよね。動いていない。一つの行事が終わると、すぐに次は何をするかという話になります。

運動というのは、英語で言えばムーブメントです。誰かが何かをしると言わないでも、これをしたければ



をしたいという人が次々と飛び出してきて、何かわけがわからないけれど、人が集まって動いているという、そういう動きを生み出していくようなものが運動でしょう。これは教団という組織的な取り組みの枠組みがある中で、ムーブメントという動きのある取り組みが可能なかどうかという問題にもなってきました。

これは後から記録を見てわかったことなのですが、当時今のこの現在の 大谷派の 教学の 支柱・ 根源と言ってもいいような曾我量深、安田理深という方々がおられました。この方々は訓覇信雄さんが非常に信頼した方で、その教えを受けながら、そして訓覇さんたちが教団の運営の当事者になった時に、この運動を組織的に教団としての取り組みに乗せていったわけです。その時にこのお二方は最初から「それはあかんよ」と言われたそうです。教団としてそういうことをやってもダメだと。こういう具合に非常に否定的な見方をされていたそうです。

訓覇さん達は、それでもやっていったわけですけれども。そのムーブメントというものとその教団組織というものが、はたして相容れるのかどうかということです。標榜することはできる。旗印を掲げてそれをずっとやろうということで目指すところはあったことは確かです。しかしそれは教団という組織体を取り組むには相応しくなかったのかもしれない。まあそういう形しか取れないのだからとは思いますが。いろいろな人たちがわれもわれもと、自分たちがこれをやりたい、あれをやりたいと勝手に思いついてやり始めたのを、教団がいちいちバックアップしたり支援したりすることは、それは組織の崩壊につながっていかざるをえません。同朋会運動が本当にムーブメントという質をもった動きになっていったとしたら、やは

り教団というものは成り立ちにくくなっていくと思います。そして、この大谷派では大なり小なり実際にそういうことが起こったのだと思います。

どこで見たのかはつきり憶えていませんが、おそらく分裂報恩講の問題が起こったときの教学研究所での総括的な話し合いの中ではなかったかと思いますが、宮城巖さんが「教団としての運動なのか、運動としての教団なのか」と、こういう問題提起をしておられます。教団が教団として取り組む運動という位置づけで同朋会運動を見ていくのか、同朋会運動を実践していくということが教団という形になっていくのか。どちらの視点に立つかで大きな違いが出てくるのではないのか。そしておそらく否定的な意味で、教団としての運動ということであればどうしても教団を強くするための運動にしかなくていかないだろうと、こういうことをおっしゃりたかったのではないかと思えます。今この教団で行われようとしていることが、どうもそちらの方向に向かっている気がしてなりません。明らかにそういう方向に舵を切っているような感じがします。今度この婦人会館が取り壊されて教化センター構想の中核的な建物になっていくということのようです。その中で、私は恐れていたのですが、教学研究所というものが、宗務機構の中の一部署としてその中に統合されていくのではないかと、こういう心配をしておりました。独立機関としての教学研究所というものが無くなっていくのではないかと。今日、とある議員さんに聞きましたところ、ここの建物の中にあるけれども、位置づけとしては一応別に教研所長を置いて独立した機関として存続するということがあるようですけれど、それについては詳しくはわかりません。どうも私が一番心配していたほどまではひどくはならないようで少しは安心しましたが、油断はできません。

同朋会運動ということを振り返っていく場合に、どうしても忘れてはならない人の一人に丸山照雄という人がいます。

ここにおられる方はお名前をご存じの人も多いかと思いますが、最近ではほとんどこの名前を聞くこともなくなってきました。私が同朋会運動に出会った三十年前にはあちこちでこの名前を聞きました。残念なことに、一昨年亡くなられました。何と言ったらいいかわかりませんが、非常に挑発的と言いますか刺激的な方でした。この方は日蓮宗の方ですが、大谷派の同朋会運動に非常に強い関心と注目を寄せ続けてくださいました。私が知り合ったころにはもう同朋会運動はだめになったという見方をされている時期で、宗門の中にも毛嫌いをする人がたくさんおられました。それでも私は丸山さんから何度か非常に親しくお話を聞かせていただく機会がありました。

なぜ丸山さんがこの運動に関心を持つようになったかといいますと、当時は仏教の伝統教団の各派で似たような運動が起こっていました。で、丸山さんは日蓮宗の研究所の方から、そうした信仰運動の調査をするために各宗派を訪ねてまわっていたわけです。その中で、大谷派の同朋会運動だけはちよつと違うところとを感じられて、非常に強い関心を持たれるようになりました。訓覇信雄さんのところに何度も足を運んで、おそらく大谷派の中の人ではできなかったような接触の仕方ができたのではないかと思います。そして、より重要なことは、そのことをいろいろな形で文章にして残して下さっている点です。同朋会運動に関してこれほど深くまた幅広く見聞きされて、それをきちんと、その時にリアルタイムで活字として残して下さった方は他におられないと思います。しかもそれは一般に公開されるような形で、新聞であったり書物であったりあるいは論集として刊行されたりしているわけで、今日でも見ようと思ったら見られるものがたくさんあ

ります。

その丸山さんが同朋会運動の特色として最も強調されていたのは、この運動には教学がある、教学に根差した運動だということを非常に高く評価していました。単に信仰運動というだけだったらどの教団だって言うだけは言いますし、それは宗教教団としてはしごく当然のことであるわけです。

その信仰、信心というのは、それは個人の内面から出てくるものである、それは共有されえないものである。個人の内面に関わってくる信心というのは共有されることが非常に難しい、あるいはできたと思っても、それはお互いの勘違いでしかないかもしれません。それが、言葉や行動という表現を得たときに、それぞれ伝え合って確認し合っていくことが可能なのです。その言葉や行動となって表現されるところに教学がある。大谷派の同朋会運動には教学に根差した確かめがある。そして教学的な確かめにおいてしっかりとした支柱が非常に明確にあった。その運動を推し進めていく人たちが、教学的確かめの重要性をきちんと認識されておられた。丸山さんの、この点に対する評価が非常に私にとっては印象的です。それは丸山照雄という名前でいろんな本を探せばたくさん今でも手に入ると思いますが、一度ぜひ読んでみてくださいと思います。教学というものが、運動を主体化していく上では欠かすことができない基盤です。当事者性ということもその上に成り立つ。その当事者性の欠如ということが非常に気になっております。

## (2) 危機意識の希薄化

問題点として考えている二番目は危機意識が希薄化しているということです。危機意識というのは現状認識が甘いということであります。そもそも同朋会運動というのは、伝統の上に胡座をかきつづけている宗門がこのままでいいのか、という危機意識から始まっているわけです。同朋会運動が始まったのは七百回御遠忌の翌年です。一九六二年に「真宗同朋会爰柔例」が制定されたことで正式に教団を挙げての取り組みが始まったとされています。しかし、この運動はその時に突然始まったわけではないでしょう。その前の五十年ぐらの準備期間と言いますか、前史があったと思います。その前史の始まりは六百五十回御遠忌ごろまでさかのぼります。清沢満之を中心にした思想運動、あるいは教団改革運動の影響を受けた若い人たち、それが曾我量深であったり暁鳥敏であった。そしてそういう人たちの影響を受けた安田先生や訓覇さんたちです。そういう人たちの問題意識の根底にあったのは、この教団はそのままいいのかということなのです。この五十年の間には、世界的には大きな戦争が二度ありましたし、教団の中でも、曾我・金子という重要な人物が僧籍を剥奪されるという事件があったりして、決して平坦な時代ではありませんでした。紆余曲折しながら五十年を経てそういう人たちの危機意識が一つの形として出てきたのが、この同朋会運動であったわけです。ですからその原点には危機意識があった。

かつて野間宏さんだったかと思いますが、「危機感がないことが最大の危機だ」ということを言われたかと思いますが、まさにそのとおりの状況になっているのが今の私たちの教団の現実ではないかと思えます。焦りのような雰囲気はあるけれども、どうも危機感というものは少し違うような気がします。

### (3) 歴史的検証の不在

次は、歴史的検証の不在ということですが、私はこれが非常に重要な問題ではないかと思っています。

今日同朋会運動のことを語る方が何人かおられ、大谷大学の先生たちも同朋会運動について発言する方がおられます。私が不思議に思うのは、同朋会運動について大谷大学の先生から何を聞くのだろうか、なぜ大谷大学の先生なのかと疑問に思います。

私は、サラリーマンを辞めて、大谷専修学院に入学し、その後大谷大学に十年ほど在籍しておりましたが、その間、大谷大学の中で「同朋会運動」という言葉はほとんど聞いたことがありません。「自己とは何ぞや」という言葉を聞かない日はなかったような気がしますけれども、同朋会運動という言葉は大谷大学の先生たちの口から聞いたことは何度あっただろうか。おそらくほとんどない。大谷大学の先生にとって同朋会運動なんてどこ吹く風だったのではないかと思えますね。もちろん大学の外に出て同朋会運動の中で発言されていた教員がおられますけれども、そういう方でも大学に戻るとそういうことを言わなくなる。

で、何人かの大谷大学の先生が同朋会運動を考えると、時に注目されているようですけど、それほど注意深く聞いているわけではありませんが、その方たちが語るのには始まる前の話ばかりです。同朋会運動の前史にあたる話ですね。訓覇信雄・曾我量深、あるいは清沢満之から始まるそういう前史ですね。その確認は、それはそれで大事な作業ですけど、それだけでは同朋会運動は語れない。彼らは、この運動が始まったら、実際にはどうということが起こったかということはまったく語らない。五十年の間、旗印としてやってきて、この運動は真宗大谷派教団の中心に位置づけられてきた。その五十年の間にこの教団の中で何が起こつ

たかを語らないでどうして同朋会運動について考えられるのか。そのことに触れずに前史の部分だけを語るとしたら、「夢よもう一度」みたいな話にしかなくていけないのです。

非常に熱い思いを持って始まったこの運動が、取り組みの過程でどういう出来事に遭遇していったのか。それはもういろいろありますが、その中で課題を与えられたという意味で、どうしても忘れてはいけないことが三つ挙げられると思います。それは部落差別問題と靖国問題と教団紛争です。かなり色あせてきてはいますが、今日でも辛うじて課題となり続けています。

この一つ一つの中身については、時間がありませんので深くは立ち入ることはできませんけれども、部落差別問題や靖国問題がこの大谷派の中で重要な課題として一定の位置を持ち得たのは、そして今日もおそれが続いているのは、同朋会運動があったからだ、と私は思います。

この教団内部の人が非常に問題ある発言をして、解放同盟からの厳しい指摘を受けるといったことが何度もありました。その時に、部落差別問題は重要な問題である、教団として避けて通るわけにいかない問題だということに気が付いて、重く受け止める人が、同朋会運動から育った第二世代第三世代の中に一定程度この教団にはいたのです。決して多数とは言えません。けれども一定程度、全体からみればごく少数派ですけれども、きちつと受け止めようとした人、受け止めなければならない問題だということに気が付いた人たちがいた。そしてその人たちの声は無視されなかった。多数派にはならなかったけれども、やっぱり教団として避けるわけにはいかない課題となりました。

靖国問題は非常にデリケートな問題でした。遺族会の会員と真宗門徒というのはかなり重なっていました。ですから、ご住職たちがこの問題についてお寺で語ったことで、かなり反発を食らうようなことになりました。



た。それでも語ることをやめなかった人がいました。そしてこの問題について学ぶことをやめてはいけないうう気持ちを持ち続けていった人がいました。そういう人がこの教団にいたことは、私は同朋会運動の成果だと言っていると思います。この二つの重い問題が、この教団においては闇に葬られなかったのは、この教団に同朋会運動があったからだと言ってもいいと思います。

しかしながら、今日でもなお、これらの問題に取り組むことはいいかげんに止めてしまいたいと思う人もたくさんいると思います。あるいは教師修練の課題から外してしまいたいと思っている勢力が少なからずあると思います。そういう事態になっていないというのは、かろうじてこの運動の成果がまだ続いていると言えるのだからと思います。教師修練からこの問題が消えたら、本当にもうあかんと思いますね。

そして三つ目の教団問題というのは、これは丸山さんから教えてもらった視点ですが、同朋会運動があったから教団問題が起こったのだと思います。つまり同朋会運動というのは、教団というものを根底から問い直していった、仮に教団が無くなったとしてこの同朋会運動をやりとげるのだという、そのぐらゐの意義を持った運動として始まった。

大谷家やその近くにいた人たちは、この運動をそのまま指をくわえて見ていたら自分たちの地位・立場がなくなるといふことに気が付いた。そのことに気付いた人たちが、このまま見過ごすわけにはいかないといふことで、大谷家を中心としてまとまろうとする人々たちを結集して真宗大谷派から離脱しようとした。その動きが東本願寺をこの宗門から切り離そうとするという形で起こってきたわけです。その発端となったのが開申という事件です。これは法主・管長・本願寺住職というこの三つの役職を同時に引き受けておられた法主が、管長職だけ長男に譲るといふことを内局に通告したという、事柄としては非常にささいな出来事です



が、大きな意味を持っています。つまり宗門・大谷派という宗教教団と東本願寺というものを分離させることができる体制を作ろうとする動きの第一歩が官長職の切り離しということだったわけです。その出来事がきっかけとなって、宗憲が改正されて、東本願寺というのは独立した宗教法人ではなくなりました。そういう結末を迎えることになりました。丸山照雄さんが指摘するように、この事件は明らかに同朋会運動があったからこそ起こった問題だったと思います。

いずれの問題も同朋会運動のその前史的な精神に立って、信仰運動ということを重視して同朋会運動を何とか盛り上げていこうとする、そういう思い入れが強い人たちから見ると、これらの問題は、単なるごたごたとか社会問題にすぎないという風にしか見えなかったのかもしれませんが。そういう人たちにとっては、あんな問題にかかわらずあつてから同朋会運動がいつまでたつてもちゃんとしないうだという、こういう見方をしていたのではないか。こういう見方はかなり強かったと思いますし、今でも根強く残っていると思います。私は同朋会運動というものを、今日の時点において考えていくのであれば、この三つの問題というものを抜きにしては語れないと思いますし、これらの問題を抜きにして運動を展開しようとするのだつたら、もう同朋会運動は止めたほうがいいと思います。

そうした取り組みの中で特筆すべき問題として二つの差別事件を取り上げておきたいと思います。それは曾我量深と訓覇信雄というこの二人の人が差別発言をするという問題が起こったということです。その他にもいろいろと差別事件はありましたが、この二人の問題は特別に大きな意味がある。

曾我先生という、教学的な支柱であった方が最晩年に部落差別発言をしたということは、この運動の教学

的根底が問われるという重い出来事です。不幸にして、当時の教団情勢の中でいろんな形で利用されるというようなことにもなりました。曾我先生の周囲には当然、事を穏便に終らせようとするので先生を守ろうとする動きもあつたことと思います。それは想像にかたくありません。重要なのは、曾我先生にこれは大事な問題だということを伝えに行く人がいたということです。しかもそれは曾我量深という人を先生と仰ぐ人たちだつた。

この差別発言をしたということで曾我量深という人の仕事を全て否定する必要はまったくありません。むしろ、曾我先生においてさえもそういう発言はあるんだということを、曾我先生が身をもって示してくださいました。だからどんなに思想的に深い仕事をされた人であっても差別発言をするのだということです。だから、どんなに注意したって問題発言、問題行動というのは無くならない。これは差別問題に向き合うときの原則、基本的な視点だと思えます。

私は、『観無量寿経』の「旃陀羅」記述、善導大師のそれに対する註釈の問題も、これと同じことだと思えます。問題言辞があるからといってそれを削除したり弁明したりすればいいというものではない。大事なのは、経典の中や善導大師の言葉の中にさえもこういう差別言辞はあるのだと、そのことをまず認めることです。善導大師の旃陀羅の解釈とは「性、凶悪を懐きて仁義を閑まわらず。人の皮を著たりと雖も、行い禽獸に同じ」と、こういうひどい註釈をつけています。では、この発言を取り上げて、善導大師が極めつけの差別者であつたのか。そうではないと私は思います。善導大師という方は、人間の格差とか差異というものをいかにして乗り越えてゆくのかということをとことん問題にされた。そして差異が意味をもたないという本質を浄土教の教えの中に見ておられた方だつたと思います。つまり平等を実現する教えがここにあると言いたかつた。し

かしその善導においてさえも、一方で社会の外に位置付けられた人たちに對しては、容赦のない言葉を浴びせていくということがある。差別の問題というのはこういう形でどこにでも飛び出してくるんだということを見せてくださっている。それほど根の深い問題なのです。

曾我先生という方も、同じように、ご自分の生き方の上において私たちに見せて下さっている。ですから教學を極めたら差別をしなくなるわけではない。そのことに気がつかせてもらったのが部落差別の問題との出遇いであつた。非常に象徴的に曾我先生の差別発言に集約されている。差別発言をしたことでその人格が全否定されるわけではない。曾我先生の場合は曾我先生の教えを受けた人の中からそのことを指摘しに行く人がいた。そういう人が曾我先生の教えを聞いて育つていったのです。非常に重要な問題だと思ひます。一方では曾我先生に傷をつけてはならないという、そういう動きをなさつた方もいらつしやいます。もう一方では、これを機に曾我一派を教団の指導者から排除しようとする動きもあつたという具合に聞いております。まあその辺のことはここで詳しく申し上げる必要はないと思ひますけれども、そしてそれを受けて曾我先生はすぐに事の重大さに気がつかれた。そういうことが、曾我先生という人のすごさだと私は思ひます。

もう一つの訓覇信雄さんの問題は、それが同朋会運動の生みの親、あるいは推進力であつたともいふべき人物が差別発言、問題発言をしたということの問題性をどうみるかです。あの時も解放同盟から非常に親切で丁寧な糾弾・指摘をしていただいた。この糾弾会には私は直接立ち会つことができませんでした。曾我先生の「異なるを嘆く」という自己批判書、これは私はやはり教学生命をかけた自己批判書だつたと言つても良いと思ひます。訓覇さんの場合はちよつとそこまで言えるかどうか分かりませんが、それなりの回答書がだされました。

回答書と言えば、何かその大谷派が解放同盟から度重なる糾弾を受けて、その時々々に真剣な対応をしてきたと思います。と同時に、どう言いますか、皮肉な言い方ですが、だんだん回答書の作り方がうまくなくなっていったという、こういうことになってしまっている気がするんですね。

難波別院輪番の差別事件の時に八回回答書を出したかと思いますが、だんだん良くなっていくんです。最後は文句のつけようがなくなってくる。その文句のつけようのない回答書の書き方のテクニクを学習していったみたいな感じがします。つまり解放同盟にはこういう回答をすればいいというような、もちろんそんな意識で回答書を書いたわけではないのですが、何か糾弾会を通して学んだことが、ややもするとそういう学習能力の中に吸収されていったような気がしてならないのです。

ただ、訓覇さんの発言に際しても「これは問題発言だ」という指摘と、一方では「重要な問題ではない」「当たり前のことを言っただけだ」という、いわば擁護的な見方をする人もいたかと思えます。この時も、この発言の問題性に気づき、指摘して問題として取り上げていくことができたというのも、そういうことができます。人たちがいた。同朋会運動の中で生まれてきた人がいたから可能だったのだと思います。

この二つの差別発言事件は、同朋会運動における教学・思想的な部分と運動を推進する部分の両方が根幹から問われてくるような事件であった点で重要な意義がある。決して忘れてはならない事件だと思えます。そして、この二つの事件がどういふ問題だったのかということを考えて整理していくことを抜きにしては、次のことを考えることはできない、もっと言えば、抜きにして考えてはいけないのではないかと思えます。つまり、この二つの事件が二人の個人的な過ちとして起こったのか。個人的な責任に帰することができるかということを考えなければならぬ。これらの発言が教学的に何らかの問題があったのか、あるいは運動の

理念の中から必然的に起こってきた事件なのかということをはつきりさせなければならぬと思います。言いかえれば、たまたまこの二人の口が滑って起こった問題にすぎないのか、この二人の発言は出るべくして出てきたのか。どちらの視点に立ってこの問題を見るのかです。私は後者、つまり同朋会運動を生み出した教学あるいはその理念というものが、こういう差別発言を生むような質を持っていたと、この視点に立って考え直さなければならぬのではないかと思っています。

訓覇信雄さんの場合はある意味では信念を持ってした発言だと思っています。決して魔が差したとか間違えたというような発言ではなかったと思う。訓覇さんの「自己とは何ぞや」という問題が明らかになっておらんのに同和・靖国をやっている暇なんかないという、こういう発言は、当時も今日もなお、教団内においては支持される雰囲気があるわけです。そうしますと、やはり同朋会運動を生み出し支えてきた教学や理念について、根本的に考え直しを迫られるような質の問題がこの二つの差別発言から提起されていると言わなければならぬと思うのです。ですから、私はこの二つの問題というのは同朋会運動の中で非常に重要な位置を持っているという立場から見ているわけです。しかし、一方では「同和」・靖国という問題を、同朋会運動にとつては邪魔になるごたごたにすぎなかったとい見方がある。そういうところから見れば訓覇さんの発言は支持される部分があるわけです。ですからこのところをきちんと押さえて、その作業を続けていかないと、この運動が変質してしまうのではないかという気がしております。

#### (4) 批判(精神)の封印・封殺

それから批判精神というもののありかた。これは先ほどの危機意識の問題と同じなんですけど、なぜこれがここに挙がつてくるかと言いますと、どうも何か最近「批判」という言葉を使うと敬遠する人がいるように思います。特に若い人に少なくない。批判という攻撃的なことはよろしくない、というような意味のことを言われることが何度かあったもので気になっております。批判精神こそが、同朋会運動の原点であり、運動が歩み続けていく時にはなくてはならないものです。批判が許されない組織や運動というのは、突っ走ってしまい、ブレーキがかけれなくなる。それは恐ろしいことです。批判が許されないという事態だけは避けなければならぬと思います。それが組織や運動が健全性を保つためには不可欠の精神です。だいたい「よくぞ耳の痛いことを言ってくれた。ありがとう」、批判に対してこのぐらいのことが言えるぐらいの度量がない人間には、たいしたことはできないと思います。

## (5) 教学(思想) 的確認・検証の欠落

そして次の学術的な確認とか検証が欠落しているというこの辺が、今日の問題提起の中心になる予定なのですが、どのぐらい話せますかわかりません。この問題は(6)の「信の変質」とか、(7)の「理念の消滅」という問題とも関わってきます。

そもそもこの「教学」という言葉がいったい何を指すか、どういうことなのかということがまず問題になります。私もそんなに深く考えて申し上げていくわけではないのですが、教学ということで単純に私が思っていることは、まず一つは何をどのように見るかという問題です。もちろん聖教を読むということもありますし、今日の前にある大きな問題をどのように自分自身が把握していくかという認識とか把握の問題ですね。それが何かを学ぶとき、ものを考えていくとき最初にやらなければならぬことです。そしてそれを見た結果そのことをどう受け止め、感じ、考えていくか。自分の中でそのことをどのように咀嚼・消化していくかという作業が次にあります。これは八正道の中の正見・正思惟ということになります。そして最後はそのことをどう表現していくかです。表現というのはもちろん言葉で表現する場合がありますが、それだけではなく、態度や行動で表現する場合がありますし、制度を作っていく表現もあります。教学といっても、言葉による表現だけではない。

組織というのはやっぱり制度ですから、どういう教学・思想にもとづいて、どういう表現活動・表現行動をしていくかというところに繋がっていく。それがすべて教学が基盤になった表現です。どういう発言をするかということと同時にどう行動していくか、また逆にどう行動しないのか。



どう見るかという以前に何を見るかということの中にもすでに選択があります。目に入っても見えていないということはいくらでもありますし、見えていても知らん顔をすることもある。そもそも自分が何にどう注目していくかということで、目に入るものが違っていきますからね。

見たものについてどう考えるか。何を見るかという時にはですね、それぞれのめぐりあわせとか縁で違ってきます。日本中の皆が皆沖繩のオスブレイの問題について一斉に同じような真剣さで考えなければならぬということではありません。また、何もしなければ教学・思想的ではないかと言えばそんなことはありません。よく僧侶の社会問題・政治問題に関する言動を問題視する人がいますが、そういう発言そのものも、あるいは政治問題に関わらないという態度決定というの、教学的であり思想的な言動であり、またきわめて政治的な行動だと言わなければなりません。沈黙を守ることも、何もしないということもそれはそれでりっぱな「行動」であるということを忘れてはならないと思います。

どういう問題にどういう関わり方をしていくかということは、やはり縁によって違ってくる。目の前に津波の被害があった人はどうしてもそこに目が向いていくし、放射能の中で暮らさなければいけない人はそのことに目が向いていくのは当然です。そのことを受けて自分がどう考えるか。そしてどういう言葉を発信していくか。どういう投げかけをしていくか。その中でどう自分自身が動いていくか。こういうことのすべてが、私は教学ということの中身になっていくのだと思います。私の場合は浄土真宗の聖教を読むということを通していろいろと考えて表現していくことを主要な活動領域としている人間の一人です。教学というと、大概の場合は、そのような聖典とか聖教という土俵でやっていくことが教学という具合に考えられているような気がしますけれど、私は必ずしもそうではないと思います。それはかなり狭い意味での真宗教学



の一領域にすぎないと私は考えています。

その狭い領域の中で教学的な営みをしながら、私としては結局何を中心にすえて大事にしていくかということが中心的な関心事です。さまざまな人のさまざまな関心事と、私の関心事がどこかで共通していく地平があるどうかということです。私においては、そこに「ただ念仏すべし」という言葉が中核に座っています。そこを外さないようにして、さまざまな問題に向き合つて、それぞれ縁に触れて見て、考え、言葉や行動で表現していく。私たちをつないでいるのはそういうことだと思ふのです。

教学と信心との関係ということについて言いますと、信心というものには決して教学は必要ありません。教団なんかも要らないんです。逆に教学には信心が不可欠です。

信心というのはあくまでも一人ひとりのところで成立するのです。何事かを受けとめるだけなら、教学も教団も必要ない。ところがそれを言葉や行動で表現したり制度として作り上げていくときには、教学が必要になります。また、教学においては、信心がなければ、教学が教学として成立しない。

教学というものを成り立たせる上では、信心が必要不可欠です。この場合の信心という言葉には、先ほども言いましたようにちよつと注意を要しますが、運動というのは信心が自己表現していく中で起こってくる行動の連鎖です。信心だけなら教学はいらないけれども、それが表現の形や制度というものを持とうとするときに教学というものが必要になってくる。考え表現していく力に必要なのが教学です。考えたり表現することをしないのであるなら信心は信心として一個の人間の中にとどまっていける。でも、表現を持たない人間というのはいけません。ですから、何らかの表現の姿をもっていく、そのことを無自覚ではなく自覚的にしていこうとする時に、自分がどのような言葉に触れてどのように考えるかということが重要になってくるわ

けです。基本的には信心に教学は要らないけれど、教学ということがきちんと意味を持つていくには信心はなくてはならないものだと思います。

このことに関連してもう一つ申し上げたいことがあります。私たちは信念に基づいて動いているという具合に思っていることがありますけれど、その関係は実は逆ではないかと思えます。つまり、信じているように動いているのではなく、動いているように信じてるのだと。どれだけ恰好のいいことを言っても、その人が行動を取るときに、その行動の中に信じていることが隠しようもなく現れてくる。

儀式や制度もそうですね。儀式というものは教学から生まれてくるんですけど、現にある儀式というものが、その人や集団が信じていることの表現態です。その人や集団を支配している考え方の表現なのです。だから教学と声明、あるいは儀式と声明・作法と言いますが、今の我々の教団で執り行われている儀式作法あるいは制度というようなものが、実は私たちの信心の表現態、すなわち教学として生み出された形なのです。その形を支持している教学の持ち主である。それこそがその人のあるいはその教団の信心の具体的な形なのです。その中で現にある制度や儀式が何らかの形で変わっていくというのは、そのプロセスを生み出すのが運動というものなのだろうと思うのです。ですから制度や儀式、あるいは体制というのは、そう簡単に、一朝一夕に変わるものではないですけど、そのことを志向し続ける、目指し続けていくことが運動になっていくのだと思います。

教学から信心が生れないというところにたてば、教学と教化というのは、私はこれは全く違うものだろうと思っています。

最初の方で教化センターの中に教学研究所が統合されていくのではないかと心配をしていると言いました

けれども、一九五八年に同朋会運動が始まる四年前のことですが、それまでは教化研究所と名のついていたところが教学研究所に改変されていきます。これは時期的に見て当然、同朋会運動を生み出していく中での改変であつただろうと思ひますし、その初代所長に蓬茨祖運という方が一九六一年に就任されたということから考へて、単なる名称の変更ではなく、中身も相当変わったのだろうと思ひます。その時に、教学研究所は宗務行政から独立した部署になつた。もちろん、完全に独立はしていませんけど、いわゆる宗務役員の行政機構の一部ではなくなつて、独自の人事権・独自の判断権限を持つ組織として成り立つていくわけです。それが一九七二年、同朋会運動が始まつて十年目に真宗教学研究所と改称されます。改称というのは名称が変わる。その時に山口益さんという方が、大谷大学の学長をやられた方ですけども、所長になります。で一九七六年に宮城巖さんが所長になつて、宮城さんが辞めた後にしばらく所長不在の時期が続いて、その火中の栗を拾うような形で嶺藤元宗務総長が教研所長に就かれます。私はそのころに二年間だけ非常勤囑託として教学研究所に在籍しました。

教化研究という仕事であれば、教団体制の内部にあつて、布教伝道ということが主な仕事ですが、教学研究というのは必ずしもそういう仕事を主眼に置かなくてもいい。教化というのは第一義的には仏法興隆ということですが、それはそうなんです、教団として教化ということをやつていくと、どうしてもそれは教団体制の維持強化に資する仕事という意味合いが強くなる。教学研究というのは、必ずしも教団に奉仕するのの仕事ではない。教団が依つて立つところの仏法を、浄土真宗という教えを学として明らかにしていくのがその役割です。ですから教学が教団に奉仕するのではなく、むしろ逆に教団が教学に奉仕するというのが、

基本的な関係のあり方だと私は思います。教団が道を誤ってしまいそうになったとき、その過ちを指摘し、進むべき方向性を示すのが、教学研究ということの一番大事な仕事なのです。ですから、教学研究所というものが非常に重要な役割を果たすべき機関だと、私は思っています。

教学研究所のそういう役割が、一番顕著な形で出てきたのは、いわゆる「分裂」報恩講の時の警備問題に対する見解が表明されたときです。

一方がもう一方を排除していくというような中で報恩講が勤められていくような形になっていくことに対して、教学研究所が「それはおかしい」という見解が示された。そのあたりのことについては『教化研究』の八十七号などに、事後ですが総括の座談会記録などが公表されています。なかなか手に入りにくい号ですけども、どこかでお読みいただけたらと思います。それから少し年数が経ってからですが九十一号にも、同朋会運動の問題についての所内の話し合いが掲載されています。

いわゆる「分裂」報恩講問題の後、教学研究所は非常に機能しにくい状態に陥りました。そんな中で、火中の栗を拾うような形で所長に就任した嶺藤元宗務総長が各地から招聘した人たちが教研の再生をしようと思いました。その頃私は大学院生でしたが、非常勤嘱託という形でそこに関わっていました。会議に出席しても、それぞれの人が好き勝手なことを言うことができる雰囲気がありました。学生の私でもほとんど遠慮する必要がなかったですね。言いたいことを言えました。所長、所員と助手、そして非常勤嘱託までがほとんど等な立場で会議に参加することができたという印象を私は持っています。そのような中に身を置いたことで、教学担当部門が教団の中で曲がりなりにも独立した機関としての位置づけを持つということが、どれほど重要なことかということを感じることができたように思います。

現在、教化センター構想が進められていく中で、いわゆる教化つまり教え導くという方向に政策の重点の舵を切ろうとしているように見受けられるのですけれども、先ほども言いましたようにどういう人がどういう場所を生み出そうとするのか、そういうことは自明、すでに分かっていることなのではないか。何をどのように伝えるとかいうことがはつきりしていて、それを推し進めていくということだったらまだいいのですけど、何を伝えたいのか、何を教えようとするのか、その一番肝心なところがまったく伝わってこない。もつと言ったら、真宗あるいは仏教ということにおいて教化ということが成り立つのかどうか。仏教において、人が人を教化するということが成り立つのか。凡夫が凡夫を教え導くということができるという前提に立って、教化ということを考えていこうとするのか。少なくとも私が学んできた中では、人が人を教化することはできないことであるというふうに聞いてきました。できないから他力回向なのです。できないことを承知の上で、それでもなおやれることをやっている、それだけです。自分たちにはできないことをしようとしているのだと、それがいわゆる教化という場に立つときの基本姿勢です。できるからするのではなく、できないけれどやらざるに出来ない。できると思っているやるなよということ。だからできなくて当たり前だということ。できない、けれどもやりたいのかどうかと問われ続ける。できるとわかっていることだったから誰でもやれます。だから大谷派のお説教というのは難しいんです。できないことをしようとしているのですから。決まりきったパターンを繰り返すということにはおさまらないのです。どうしたらそういうお説教ができるかということなんか、だれも教えることなんかできないのです。台本がない。あつたら楽だと思いませんよ。こんな題材をこうやって組み立てて、こういうエピソードを入れて、最後こういう具合にまとめなさい。そういうやり方いいならカリキュラムを立てて、練習を重ねていくということができるかもしれませ

んけど、そういうこと自体がいわゆる教化という名に値するかどうか、いわゆる「やり方」で仏法の肝心なところが伝わるのかどうか、そういう根本的なところが問題になったのが同朋会運動であったのです。教化ということをして、「いかにして」という所ではなく、その言葉の意味するところ、教化の内容そのものを問いの対象にしてしまった時に、非常に難しい運動になったのです。何をどうやって実現するかということを非常に語りにくい。いつも模索し続けるという形にしかならなかった。だからすつきりしたいという気持ちがあるのにいつまでいってもすつきりしないんですよ。で、そのすつきりしなさをずっとこう抱え続けていくところに智慧が要るのです。完成ということがない。成功したということも言えない。一旦「うまくいった」と思ったら、それはすぐ検討の対象となる。つまり結果がでたら、そこからは問題点を探す作業の始まりになる。同朋会運動を契機として教化ということが、根底から問い直されたことは間違いありません。それはとても重要なことであつたと思います。しかしその結果、元も子もなくなつてしまつたと言わなければならぬような状況が生れてきたのも事実です。

## (6) 信の変質

同朋会運動においては「信心」とか「自覚」ということが一貫して非常に重要な言葉として語られてきたのですけれども、最近私は、実はそこに大きな問題があったのではないかという気がしています。こういうことを言いますと非常に誤解される危険があるかと思えますけれども、その言葉に振り回されたことによつて私たちは大事なものを、大事な事を見落としてしまったのではないかと思うのです。一番肝心なところに、一番根の深い問題がある。今から振り返つてみると、信心とか自覚というものが、何か一つの内面のあり方として想定されて、そしてそれが獲得目標のようになってしまった。そして人はそれを得なければいわずに往生が定まらないというような、つまり信心あるいは自覚に立った時に初めて我々は立派な念仏者なんだというようなことになってしまったのではないか。こういう単純化した言葉では不十分かもしれませんが、何かそういう言葉として信心とか自覚という言葉が機能するようになってきたと思います。その見方が正しいかどうかは議論が必要ですが、信心にしても自覚にしても、それが獲得目標のようになってきたとすると、それは浄土教ではありません。そんなのは聖道門ですよ。「悟り」と「信心獲得」が置き代わつただけです。そういうような信心とか自覚ならば、ごく一部の人のしかその利益が行き渡つていかないですよ。あなたたちも早く自覚に立ちなさい、信心得なさいと。そのように言うことは、焦りを生み出していくだけです。真宗門徒を自認している人の中に、いったい何%の人がそういう問いに対して「私ははっきりしました」と言える人がいるだろうか。百人に三人か四人いるかどうか。信心がはっきりした人、あるいは自覚に立った人たちのためだけに意味のある念仏を、私たちはもしかしたら魅力的なものとして聞いてきたのではなかったか。



信心ということは重要な問題だけれども、私たちが一々それを気にする必要はないのです。念仏ということの中にそれが全ておさまって行くのです。実はこれは法然上人がおっしゃったことに非常に近いのですけれども、現在こういうことをはっきりと声に出して言っている人が、私の知る限りは数人しかいません。親鸞聖人と法然上人は、その点について同じなのか違うのか、違うとしたらどこでどう違うのかどうかという問題ですね。そういうことを考えていく中で信仰運動としての同朋会運動のありかた、あるいは浄土教というもの、いったいどういう教学の上に成り立つのか、自らがどういう立場に立つていく教えなのかということが問題になる。信心とか自覚ということが非常に魅力的なこととして私たちに伝わってきたために、逆にそのことの意味が分かりにくくなってしまったのではないか。少なくとも私は、「信心」ということを聞いて、最初は非常に魅力を感じました。私より二十才から三十才ぐらい上の、第二世代ぐらいの先生、そうした先生たちが語る言葉に非常に私たちが惹きつけられました。「あんな具合になりたい」とかそういう人たちがたくさんいました。立派な先生たちがおられたと思います。現在、気が付いてみたらそれらの先生たちがおられなくなってしまう。そして今の私たちは、あんな立派な先生のようにはなれなかったという、ある種の劣等感を持ったまま取り残されていってしまったような気がしてならないのです。そういう問題が、信心とか自覚というような言葉で語られてきたことの功罪の「罪」の方じゃないかという気がしております。

『教行信証』の「化身十卷」に「懈怠界」という言葉が出てくるところがあります。それは『菩薩処胎経』という經典の中の「西方の阿弥陀仏の浄土の手前には懈怠国という国があつて、多くの人がそこにどどまつて先に進んで阿弥陀仏国に生れることができない」という話を、それを懐感という人が『群疑論』という書物の中で取り上げて問題にしています。懐感がこのことを取り上げた問題意識は、西方浄土に限定しようと



する浄土教徒に対する疑問が前提になっています。「西方浄土がそんな厄介なところなのに、なぜ君たち浄土教徒はそこにこだわるのか。他の東方や南方ではだめなのか。もつと楽に往生できる国土を目指せばいいではないか」と、こういう議論です。

その『群疑論』の記述を、今度は源信が『往生要集』に引用します。ところが源信がその文章を取り上げる時には、問題の焦点が、懐感とは少しずれていきます。西方か否かということは問題になっていません。なぜ懈慢界に留まってしまうのか、どうすればそこを突破できるのかということが問題になります。源信の結論は執心が牢固であるか否かということになります。つまり真実報土の往生を求める執心が確固たるものであるか否か、ここが境目なのだということを言い、そしてその執心とは雑修を捨てて専ら阿弥陀の名を称することによって、その難関を通り抜けて先に進んでいくことができるのである、とこういう取り上げ方をしています。

その『往生要集』を今度は親鸞聖人が、孫引きの形で化身土巻に引いておられるわけです。私は、この化身土巻への引用で、さらに焦点の当て方が変わっていると思うのですが、これまで私が見た『教行信証』の参考書は、だいたいにおいて今言いました源信と同じような趣旨で了解されています。ところが、『教行信証』の化身土巻の流れの中でその問題を見ておきますと、親鸞聖人はそういうことをおっしゃっているのではないのではないかと思えます。化身土巻というのは、冒頭の御自釈を見ると明らかのように、真実なる者はごくまれにしかおらず、逆に虚偽なるものはなはだ多いという、この現実認識が問題意識の出発点になっております。目に付くのは偽物ばかりであって、本物なんかどこにもみあたらない。そういう者のために、釈迦が法を説かれて導いてくださり、阿弥陀如来の本願はそのような人間のために発こされたのだと、これ

が化身土巻の出発点の問題提起なのです。そうしますと浄土真宗というのは、そういう偽物が本物に代わって救われていく教えなのか。先ほどの懈慢界で言うと、多くの者は懈慢国にとどまって、そこを抜けていくのは億千万に一人か二人だということになる。その億千万人の中の一人か二人の、スーパーエリートのような者を生み出す教えが浄土の教えなのか。そのところは皆さんどう思っておられるのですか。娑婆では凡夫だけれど、浄土の教えにおいては、すなわち宗教的な領域では超エリートになれるのだと、そういうことを勧める教えなのか。私たちが目を向けなければならぬのは、一人か二人の例外的存在になることではなく、問題にすべきなのはそこにとどまって出る術をもたない九十九万九千九百九十八か九人の方ではないのか。如来の本願を切実に必要とするのは、実はこちらの方なのではないか。ここに焦点を当てて見ているのが、親鸞の懈慢界の取り上げ方なのではないかと思っ読んでいます。

そもそも懈慢国とは何か。なぜそこがそこにとどまって先に進もうとしなくなるのか。その理由ははっきりしています。そこを本当の浄土だと勘違いしてしまうからです。目的地に着いたと思ったらもう先に向かつて進もうとしない。当たり前のことです。着いたと思っただ安心感・達成感・満足感が、先に進む心、道を求めて進んでいく意欲、すなわち菩提心を失わせてしまうのです。歩み続ける力を奪うのが懈慢国だと、こういう問題意識で、親鸞聖人はこの話を見ておられて、問題を提起しているのだと思うのです。

ところが私たちは雑修をすてて専修の執心を固く持ち続けければ、必ずその懈慢国を突破できると、こういう都合のいい解釈をしてしまっている。本物になりたいと思いつつもそうではないあり方を生きている、そういう者をどうするかというのが、私は浄土教の最大の課題だと思っのですね。

いわゆる自覚とか信心という話は、聞いているとカッコいいですよ。私もかつてはそのようになりたいと

思いました。でも、求めるとか欲しいということの対象としてしまったらいけないのでしよう。では、自覚とか信心というのは妄想なのかというと、そうではありません。求めて得られるものではなく、結果としてそういうことに気づいていく人がいるということです。それがいかなるものであっても獲得目標にしてしまうと、すべて聖道門的発想になっていきます。未だ手にしていない何かを求めていくという形で問題を設定したら、これは努力とか精進を積み重ねることで、いつかはそこにたどり着きたいということに成らざるを得ません。聖道門というのは到達したいという発想です。ところが到達したいという思いがあるということ、未だ自分が到達していないということを物語っている。まだ自分が手にしていないから欲しいのです。で、求めている限り、いつまで経ってもまだ自分にはそれが欠けているという事実が続いていく。そして、自分にはそれが無いという思いをずっと持ち続けていくことになります。そういう発想を従因向果といいます。

その視点を逆転させたのが龍樹です。仏道の歩みというものを到達するという発想で考えることをやめた。到達を目指すのではなく、最初のスタートラインに立つということを勧めた。最初の一步を踏み出せばいいんだと。その発想が浄土教の出発点です。

歩み始めた道が浄土につながっていれば、その道の確かさが私たちの歩みの確かさを保証してくる。踏み出すべき道が、必ず浄土につながっていく道であればいいのだと。こういう形で往生とか正定聚という正しく定まるといふことがある。不退転というのは人において確立するのではなく、道が不退転なのである。だから間違ひなく浄土につながる道に立って歩むことを始める、そこに不退転という意義が成り立つ。そういう風に仏道というものの見方をひっくり返して明らかにしてくださったのが龍樹であり、それを浄土の教えとして確かめたのが曇鸞であった。そのことを、今日の私たちにはつきり示して下さったのが曾我先生です。

少なくとも私はこのことは曾我先生から学びました。

そうするとその最初の一步を踏み出せばいいということですが、これは一人の人が百歩歩むよりも、百人が一步歩むということの方が大事にしたのが浄土教だと思う。一人で千歩・一万歩と歩みを進めていくのがいわゆる聖道門、エリートになっていく歩みです。そういう道を拒否して、百人が一步むということを大事にした。一人の百歩より百人の一步の方がはるかにいい。この発想の中に私は「ただ念仏すべし」ということが位置づけられているのだと思います。

## (7) 理念の消滅

七番目は理念の消滅という問題です。歴代の内局は、いつも口を酸っぱくして同朋会運動に取り組もうと  
いうことを真剣におっしゃっているのですけれども、最近どうもそういう言葉が響いてこないのです。三十  
年前に、同朋会運動を語る言葉からは何かワクワクするようなものが伝わってきました。それは、私の方が  
変わってしまったのか、それともその言葉を口にする人たちに何か変化があったのか。

新しい内局になって、「人の誕生」とか、「場の創造」ということが言われているようですけれども、コピー  
としては悪くないとは思いますが、それを聞いても、いったいどういうことをしたいんだ、自分たちがいつ  
たいどうなりたいんだということが伝わってこない。どんな人が誕生することを願っているのか、どんな場  
が願われているのか。それが全くはつきりしないまま、人の誕生・場の創造という言葉だけが飛び交ってい  
る。そういう言葉は便利ですね。それを言うことで、何か意味のあることを言っているような気になるのでし  
うか。中身が語られずに人の誕生と言ったら、結局は言っている人からみて「わしの気に入るような人間」、  
あるいは「わしの言うことを聞く人間が生まれることを願う」ということになってしまふ。そうでないなら  
ば、その理念をはつきりとさせなければいけません。そしてそのためにどういうことをしたらいいかという  
ことを具体的に考えていく。

いずれにしても、成果を出せというような成果主義の発想に立つような取り組みや動きが目立ちます。人  
の誕生にしても場の創造にしても、そう簡単に結果がわかるものではない。でも、組織とか教団としての取  
り組みはどうしてもすぐにわかるような成果を求めてしまふ。そうなると、宮城先生が言った「教団として

の運動」の域をでない。「運動としての教団」というところに立ち返って考えなければいけない気がします。

最後に、これから言うことは最近考え始めたばかりのことなので、私の中でも十分にこなれていないことですが、少し聞いていただきたいと思います。

先日、仙台の教学研究所の共同学習がありました。その時の担当者が「行巻」の他力釈という非常に重要なところを担当して発表をしました。「他力釈」というのは聖典の一九三ページからですが、聖典の中身について今から説明するつもりはありませんが、その中で参加したメンバーが引っかけかかっていた問題は、他力ということはどう捉えるかということと、もう一つは自利利他という問題です。利他と他力ということの違い、区別がつかないと言うのです。

他利というのは、衆生において言われることであるわけですが、それは全体の資源が有限である場合には、必ず取り合いになるということ。つまり私のところに何らかの利益が来たという時には、その分必ず誰かの利益が損なわれているということになる。ちょっと単純化しすぎかもしれませんが、数に限りのある中では、私のところに私が望むものが来た時には、その分は他へ行くべきものが少なくなる。衆生における利というのはどこかで相反することがある。

ところが、無限なるものの利益というものはそういうことが起こらない。たとえば春というのは季節ですが、けれども、春を探しに行った者が、野山でつくしを見つけてふきのとうを見つけた。「あ、ここにもう春が来ているんだなあ」と気づいた時に、その春は気づいた人のところだけにしか来ていないかといえば、そういうことはありません。家でこたつに当たっている者にも同じように来ています。つまり一人が春を見つけた

ら、その春はみんなのところに来ている。一人がその利益を享受したら、他の人の利益が損なわれるということはありませんか。

本願も同じです。自分において如来の本願他力で救われるということが明確になった時に、それが他力を根拠とするのであれば、自分の努力とか才能というものは一切関わっていないということです。そうすると、この私を救う如来の本願というのはあなたも救うはたらきであるということが同時に明らかになる。私が救われた教えによって君も救われるんだと。なぜならこれは私の努力の結果でもないし、私に知識があるからでもない。そのところに如来の本願の他力の絶対性っていうのがあるのだから、あなたもこの教えで救われるということは間違いない。自覚とか信心ということがそこに関わるとしたら、そういう内容を持つ、すなわちそれがそのまま一切衆生に開かれているのだという自覚や信心ということではなければならないはずで。春はその訪れに気づいた人と気づいてない人を選ばずにやってくる。自覚や信心がある人だけが救われるというのならば、本願力の回向と言ってみても、それは気づきの有無で人を簡ぶ本願ということになるのです。

その時にもう一つ話したことが有ります。その時その場に二本松のSさんがいたので、彼の顔を見ていたら、何故かしらこの「他利他・自利他」という問題が私の中で急に放射能のことと深くつながっていった、こういうことを話しました。「自利他」と「利」ということで考えていたら分かりにくいけど「害」ならどうかと。「自害害他」と置き換えてみたらどうなるかというのと、「私を害するものはあなたも害するのだ」ということになる。人を簡ばない「害」である放射能は、その被曝というのは、同じところにいる人は同じように被曝してるのです。年寄りだろうが、女性だろうが、子供だろうが、同じ線量の放射を浴びるのです。



つまり放射能の影響は、老少善悪の人をえら簡ばない。もちろんそのことを知っているかいないかも関係ない。怖いと思っているかいないかも関係ない。動物か植物かも関係ない。同一条件のところではきわめて平等にみなその影響を被っているわけです。ある種の普遍性がそこにあります。

ところがその影響が何らかの形となつて顕在化していくかどうかとなると、それは非常に個別的にしか現れない。放射能の影響の出やすさについて一番顕著な違いは年齢差がよく知られています。細胞分裂の激しさがもろに関係してきます。でも同じ年齢の人で同じ線量の被曝をしてもそれが問題のある形で発現するかどうかは、これは同じではない。だれにいつ発現するかはだれもわからないわけです。しかし、症状それが出た人だけが放射能の被曝をしたわけではない。他の人も同様に被曝している。つまり私を害するものによつて、あなたも必ず同じように害されているのだと断言できる。その影響が出てくるか出てこないかの違いがあるだけなのです。で「害」をもう一度「利」に戻す、つまり放射能を本願に入れ換えてみたらどうなるか。本願は皆を同じように照らしている。放射能を妨げるものもあまりありません。無碍の光明と言いますが、放射能は無碍の害悪、何でも貫き通して犯してくる。その働きを逆にして考えるのです。みんな同じように本願力の回向を受けているのだけれど、それに気がつくか気がつかないかは個別的である。同じような縁にふれたら同じように顕現するかといえば、そんなことはない。それに気がつくのに遅い早いということがあつて、害があるということをつかた人だけが害を受けるのではないと同じように、利益も気づいた人だけが受けるのではない。気づくというのは、その利益の普遍性に気づいていくということです。ただ、なかなかそのことがみんなに聞き入れてもらえない。そのところも放射能と似ていますね。放射能の危険性というものがあるのはつきりしているのに、気づこうとしない。あるいは気がついていても知らぬふりをする。



福島で、Sさんたちが一生懸命に警鐘をならしている、「お前らが騒ぐから福島全体が冷たい目で見られるんだ」と言われる。気がついたことを伝えようとすると白い目で見られる。放射能は見えないし感じない。その危険性に気が付いた人は、放射の被曝を感じるができるようになるかといえば、そんなことはないわけです。悲しいことに、どれだけそれが危険だとわかっていても、被曝していることを実感できない。分かっているにもかかわらず。

知っている、わかっているということと実感はまったく別物です。たとえば私たちには毎秒数千キロのスピードでみんな動いています。地球が自転しているわけですからね。ところがそれを実感している人は一人もいません。でも動いているのは月や太陽ではなく地球の方であるというのは、知識としては皆十分知っているわけです。でも誰一人として実感できない。

コペルニクスやガリレオがそのことに気がついた時には変人扱いされました。彼らは地球の外の天体を観測することによって、そうであるはずだという結論にたどり着くわけですけど、それに気がついたからといってコペルニクスが地球の自転をリアルに実感してたかっていったらそんなことはありません。みんなが同じように動いていたら、動いているとは感じられない。それと同じでみんなが同じように迷いの世界にいたら、迷っている者の方が当たり前になってしまうのです。その迷いの中には迷いに気づくことはできません。コペルニクスやガリレオが地球の外の天体を観測したように、迷いの外にある一点とのつながりを持つことで、それに気がつく回路ができる。迷っていることに気づく可能性がでてくる。私たちは、その外なる一点というのを弥陀の本願として教えられている。そして弥陀の本願と我々をつなぐ細かい糸が名号という形で与えられている。本願の名号だけは我々の煩惱の真ただ中にあっても汚されない。中であってなお外

なるものとして、煩惱に満ち満ちたこの世界に生きる者に、外とのつながりを成り立たせるものとして与えられている。

そう言われても、その利益というのは非常にわかりにくい。まあ、わからないとしておく。あるいはないと考えた方が間違いが少ない。それは無碍の光明でありみんなのところに浸透していくけれど、誰一人そのよはたらき感じ取ることができない。たまに感じられるということを使う人がいますが、それは感じられるようなものを感じているにすぎません。感じられたとしても、そのこと自体に大きな意味を見る必要はありません。本当の問題は感じるができない者をどうするかということにあるのですから。まるで放射能のようですね。でも放射能はじわじわじわと我々をいつも蝕んでゆく。

それに対してどうするか。逆のことを考えるしかないんじゃないかと思えます。効果とかそういう意味で言ったら大して力がないけれども、それがじわあーつと続いていくような動きとか広がりです。個々にみたら、微々たるものかもしれないけども、そういう動き方とかはたらきかけということを考えていくしかない。一気に大きく変えていくことは願わない。じわじわとはたらき続けて動き続けていくという、放射能の作用の逆のようなこととは何だろうかと。私はそういうはたらきかたをするのが南無阿弥陀仏なのではないかと思う。念仏したとしても、すぐに目に見えるような効果を出しているようには見えないけれども、人と人との間を貫いてじわじわと浸透していく。そしてそれが何かの縁で何かの拍子にその働きに気がつく人が出てくる。非常に個別的にしか現れない。百人、千人にはたらきかけて、その中で一人ぐらいは「ああ、そういうことだったのか」と気がつく人がいるかいなか。そういう非常に気の長いはたらきかけと言いますか、動きが続いている。そういうのが運動と言えるかどうか分かりませんが、私としては、そうい

うあり方をするのが浄土教的な運動なのではないかと思っています。浄土教というのは、念仏申す人のみんながみんなその意味や意義について自覚的であったわけではないはずですが、でも自覚的であろうがなからうが、本願のはたらきの影響は誰もが同じように受けている。非常に逆説的な形ですけど、放射能の影響ということから飛躍して、そういうことを先日仙台で私は気づかせていただきました。

いただいた時間をちよっと超過しました。これがこの場にふさわしい問題提起になったかどうかわかりませんが、せんけれども、今日のところはこれで締めくくりとさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 講師プロフィール

藤場 俊基

1954年生まれ。金沢教区常讃寺住職。早稲田大学卒業後、三和銀行勤務。大谷専修学院修了。大谷大学大学院博士課程（真宗学）満期退学。

## 同朋会運動 50 年を経て

—現状におけるいくつかの問題点—

発行日 2013年8月10日

講述 藤場 俊基

編集・発行 同朋社会をめざす会

事務局

〒491-0806

愛知県一宮市千秋町浮野屋敷 191

法林寺内 眞野 琢児

<http://doubousyakai.com>



「みんな」になるな



になれ

「同朋社会をめざす会」  
<http://doubousyakai.com/>